



紹介者

里見 治紀

セガサミーホールディングス
取締役社長グループCEO

轟 麻衣子

ポピンズホールディングス
取締役社長



人々を苦しめる「神話」解消には より多くの選択肢が必要

新型コロナは私たちの生活に大きな変化をもたらしました。人口への影響も顕著で、国内で2020年生まれの子どもは過去最少の約84万人。そして21年は80万人を切る可能性も指摘されています。まさに「子どもは国の宝」。しかし内閣府が昨年度、欧州3カ国と日本で行った「子どもを産み育てやすい国だと思うか」という質問に対し「そう思う」が欧州で最も低いドイツでも77%。スウェーデンに至っては97%なのに対し、日本はわずか38%でした。

私はその背景には「ねばならない」という「神話」と無意識の偏見「アンコンシャスバイアス」があると思っています。コロナの影響で、女性に多い非正規雇用の方々が真っ先に失職したほか、保育園の登園自粛要請や学校休校で多くの女性が仕事か子育てかの二者択一を迫られました。これらの背景には「女性は家事育児に影響が出るほど働くべきでない」「夫婦どちらかなら妻がキャリアを諦めるのが当然」「大黒柱は男が担わねば」などの考えが影響しているのではないのでしょうか。「男だから…女だから…」という神話やバイアスは多くの方を苦しめ、負担の押し付け合いや不平等の甘受につながっています。

私が12歳から海外に単身留学させてもらい気が付いたのは世界の多様性でした。それを軸に今思うのは、何かを否定することなく多様な選択肢があることが人の幸せにつながるはずということです。例えば夫婦共働きでの子育ては容易ではありませんが、家族内での助け合いや行政支援に加え、ベビーシッターを気軽に…それも公的補助などで廉価に使えたら、子育てはグンと楽しいものになるはず。そして共働きでも、子どもに最高の教育や体験を与えられるサービスがあれば、きっともっと働く世代は自由な選択ができるようになり、Well-Beingも高まるはず。す。

創業以来一貫して「働く女性の支援」をミッションとしてまいった私たちポピンズ。神話やバイアスを日本から一掃し、より多くの方が子育てをポジティブに捉えられる世の中を支援すべく歩んでまいります。

▶▶ 次回リレートーク

近藤 正晃 ジェームス

国際文化会館
理事長